

中山道大井宿保存会（恵那市）

中心市街地

歴史・まちなみ

取組の背景

○大井宿の歴史

江戸から数えて46番目になる大井宿は、天保14年（1843年）当時で本陣、脇本陣各1、旅籠41軒があった。美濃中山道ではもっとも賑わった宿とされ、中山道の宿場の特徴である榊形も他より多く6つある。大井宿から榊ヶ根追分を経て、下街道（大井宿と大湫宿の間にある榊ヶ根追分から中山道と東海道を結んだ脇往還で善光寺道とも呼ばれた）を利用する旅人も多かった。

○大井宿の現況

町並は新旧の建築物が混在するものの、宿場町の雰囲気をよく残している。本陣は昭和22年に母屋が焼失し正門と松を残すのみであるが、宿場町の面影を感じさせる。高札所も整備されているほか、大井宿の有力な商家であった「ひし屋」が近世的町屋建築の特色をよく示しており、平成9年に恵那市の文化財に指定、市が資料館として保存・活用している。

阿木川を挟んだ西側には、JR中央本線の恵那駅前市街地が形成されている。平成13年には「中山道広重美術館」が開館して新たな観光スポットとなっている。また、市街地部分は平成17～21年度にかけて、「まちづくり交付金」を活用した整備が進められている。



大井宿本陣の正門

取組の概要

中山道観光は歴史愛好家を中心に根強いファンが存在し、大井宿を訪れる人々も増えるなど、恵那市の観光の柱の一つとなっている。こうした中山道を訪れる人々のサポートや、史跡研究や保存活動を目的とするグループとしては、中山道語り部の会、中山道甚平坂保存会、西行会

などがあり、保存活動、清掃美化活動などに取組まれてきた。しかしながら、旧大井宿（本町周辺）にはこれに準じた団体が存在しなかった。

平成11年10月に第14回国民文化祭が県内各地域を会場に実施されることになり、これに併せて恵那市でも中山道関連の県民文化活動が盛んになっていた。また、恵那市による中山道広重美術館、菱屋資料館の整備計画も進んでおり、大井宿の来訪者増加が見込まれていた。こうした中、郷土史家などを中心に中山道大井宿保存会の設立が発起され、旧大井宿のエリアである上本町、下本町の約60世帯に趣旨を説明し賛同を募った結果、29人の参加を得て、平成11年8月に保存会が設立した。現在の会員数は32人。



中山道ひし屋資料館

取組の内容

- ・高札場の清掃など大井宿の美化活動を年1回実施
- ・大井宿内の案内標識の整備（菱屋資料館の改修により生じた古材を活用）
- ・大井宿の学習会活動（土日を活用し、年2～3回）
- ・中山道宿場町の見学会開催（年1回）

成果

大井宿の保存、美化活動や各種地元ボランティア活動の母体となる組織が形成された。

成果の要因

国民文化祭の開催を契機とした地域での文化活動、生涯学習活動の高まりが、保存会の形成に繋がった。

その他関連事項

- ・ 菱屋資料館は市が管理。シルバー人材派遣の活用により運営されている。
- ・ 恵那市内の中山道宿場町の観光ボランティアは、「中山道語り部の会」が実施。語り部の会は、恵那市教育委員会が定期的で開催した語り部養成講座の受講生を中心に設立されたもの。
- ・ 現在、この語り部の会メンバーが中心となって、地域づくり団体「大井町夢おこし委員会」が設けられ、まちなかウォーキングが実施されたほか、町並保存のルール化などが検討されつつある。



大井町夢おこし委員会の「中山道ふれあいウォーキング」の様子（平成18年11月18日）

- ・ 市の社会教育関連予算を活用した活動や、助成を受けてきたが、社会教育関連の予算が年々減少している。
- ・ 宿場町の雰囲気維持に行政もこれまでと同様に積極的に取り組んでもらいたい。

この人にお話をうかがいました！

中山道大井宿保存会
会長 佐藤喜一さん

調査日：平成18年11月15日（木）

調査者：総合政策課 板津

東濃振興局恵那事務所 長沼

今後の課題

- ・ 会員の高齢化が進んでおり、若い世代の参加促進が課題である。
- ・ まちなか居住者全体が非常に高齢化しており、問題が顕在化^{*}している。
- ・ 大井宿の町中には昼食などをとれる店舗が少なく、観光客の足止めが出来ない。
- ・ 中山道広重美術館との周遊客が多いため、周遊性の強化など、大井宿だけではなく他の地域資源との更なる連携強化が必要である。

行政への期待

^{*} お話を伺った方は、社会福祉協議会の委員もお務めしており、敬老会メンバーの著しい増加や一人暮らし高齢者の増加といった問題への対応に多忙を極めている様子であった。